

ル 4
3525
3



門 4
號 3525
卷 3

金毘羅參詣名所圖會卷之二

目録

- 西行菴の松の圖
- 西行堂
- 西行菴遺蹟
- 芭蕉塚
- 花の井
- 後嵯峨院御廟
- 龜山院の御塔
- 後宇喜院の御塔
- 仙遊ヶ原
- 遊墳
- 大墳
- 金倉寺
- 智證大師誕生の土窟
- 訶梨帝母社
- 不動明王出現の圖
- 永井の清水
- 甲山寺
- 岩屋の毘沙門天
- 世所觀音佛
- 廣田の池
- 雲氣の神社
- 筆の山
- 筆の海
- 芋畑の古跡
- 曼陀羅寺
- 西行笠掛櫻
- 出釈迦寺
- 捨身ヶ嶽
- 世板
- 出釈迦山
- 大塔の旧趾
- 護摩壇の古趾
- 中山
- 水笠ヶ岡
- 西行菴の古蹟

三ノ宮

癸未年一月十日寄
尼野貴英氏贈

七佛薬師堂	古験の松	於波女の池	人面石
花立の碑	頼政箭止の松	樋戸野の池	弥谷寺
護摩崖	道範阿闍梨の像	求聞持の岩窟	盤石の二尊
加持水の籠	降釵の古跡	六本杉	十王堂
中院茶堂	法雲橋手掛岩	比丘尼谷	二天門 二王門
灌頂川	瓶岩	生駒一正庵の塔	香川累代の墓
山崎俊家の塔	山崎志州祖母の塔	大塔四郎右門の塔	穴薬師堂
天霧山の古城	香川長曾秋部和親之圖		勝鬨の石の塔
本山寺	高良の神社	本山寺古楹	神照寺
植田の松の圖	琴弾八幡宮	住吉三神の社	若宮権現の社
大師堂	上の菴	九重の石の塔	鐘樓中之菴

金三ノ目

龍宮風宮天神社	鹿島の神社	一之鳥居二之鳥居	宿居
十王堂下之菴	梅腋の濱	漆川	三架橋
放生川	琵琶の首	象が鼻	竹の溪
問答石	二本松	観音寺	中金堂
愛染堂大師堂	西金堂	宝塔の四趾遍照塔	弥勒堂
太子堂 籠堂	五所権現の社	青丹明神社	茶堂撰待所
五智如来石像	二王門	天神社稻荷社	日澄上人の墓
芭蕉翁早苗塚	有明の濱	漁夫烟叟の圖	観音寺川口
山口の清水	悪魔石	燧灘 九瓶島	伊吹嶋 大嶋
高橋積山	高谷神社	不動の籠	一夜菴
伊勢二郎智謀之古趾	同圖		



西行菴の遺跡
久乃松

梢を吹来く松の間
禹左

西行堂

西行菴

金三ノ目

あつと秋阿の自記ありと妻吟抄云々

西行菴

芭蕉の石塚

石面 祖芭蕉の塚ト書ス

花之井

後嵯峨院御廟

日本王代一覽曰

後嵯峨院 諱邦仁土御門院ノ第二子也母源通子宰相中將通宗カ娘ナリ兼久ノ亂ニ僅ニ三歳ナリシヲ土御門ノ大納言源通方外戚ノ親アルニヨリテ養育シ奉ル十八歳ノ時通方卒スル故ニ祖母兼明門院ノ許ニウツリ坐カナル体ニテ御座マス仁治三年正月四條院崩レテ御子モナク御連技モナケレバ誰カ継體ノ君タルヘキト沙汰アリ順徳院此時佐渡國ニテ恙ナクヲハレシ其御子忠成京ニマシテ藤原ノ道家ノ外

後嵯峨院御廟

左右 龜山院 後宇多院の御塔あり

龜山院 諱恒仁後嵯峨院

第六王子也正嘉二年八月東宮立

正元元年十一月即位

嘉元三年九月崩御壽五十三

後宇多院 諱八世仁

龜山院ノ太子ナリ

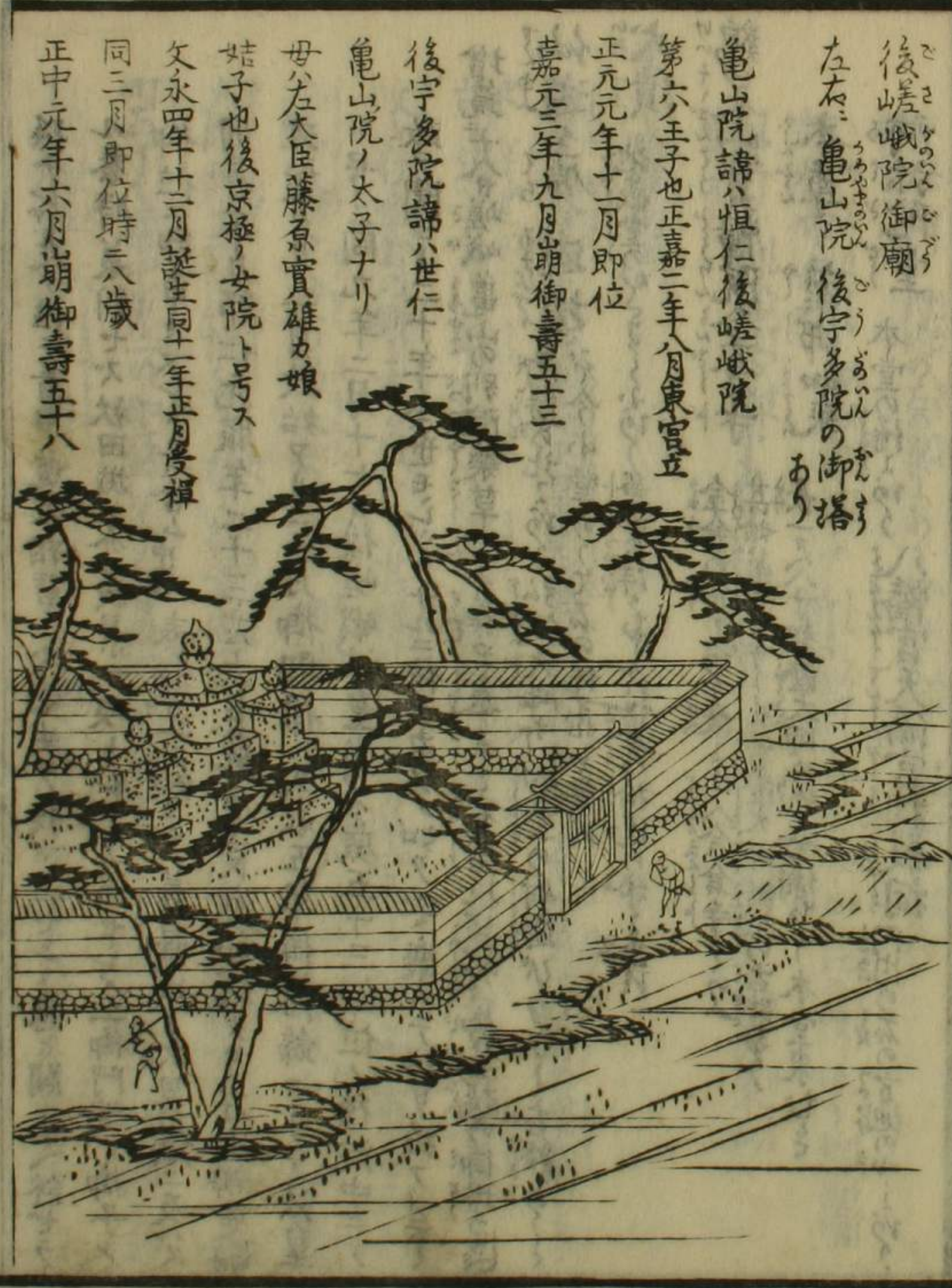
母左大臣藤原實雄カ娘

姞子也後京極ノ女院ト号ス

文永四年十二月誕生同十二年正月受禪

同二月即位時六歳

正中元年六月崩御壽五十八



孫ナレ是ラ位ニ着申道家相替ラズ朝廷ヲ我マニセント思ヒ關東ニ於セラ
 ル泰時兼引セズ秋田城ノ介義景ヲ使トシテ上洛セシメ土御門院ノ御子ヲ
 御位ニ即申スベシト云合ム中畧 泰時カ下知ニテ義景申上ハ異儀ニ及ズ
 同月二十日邦仁元服年二十三左大臣藤原良實加冠タリ左中辨定嗣
 理髪タリ二月政始アリ三月御即位 文永五年御落飾アリテ法皇
 ト号ス同九年二月十七日後嵯峨法皇崩ス歳五十三讓位ノ後院中ニテ
 政ヲ聞コト二十年余世モシツカナルニ依テカクノ如ク安樂ニテ終リ給フト云
 増鏡十八日嵯峨龜山の別院藥草院ニ葬リ奉るト有然レ此所ハ御菩提の御塔の
 仙遊原 遊墳 弘法大師初童の付遊びのいし古跡あり
 大墳 地藏堂のありし小祠ノ事実詳ニハ後述考拾遺の部ニ出ル

鷄足山寶幢院金倉寺 金倉の郷にあり故に土人金倉寺ト云
 其始道喜寺ト云智燈大師誕生の古跡あり
 長一丈八寸智燈大師の作座像あり本堂東むき
 本尊 藥師如來
 阿弥陀堂 本堂の傍にあり 八幡宮天満宮相殿祠 門内の右の方池のやうに

御影堂 門内の右の奥にあり智燈大師の尊像と安ル
 訶利帝母社 御影堂並ぶ 新羅社 訶利帝母の社の傍にあり新羅明
 神と勧請あり
 鐘樓 新羅社の前あり 二王門 金剛神の兩尊と安ル東向

當寺略縁起云
 當寺ハ西四十九代光仁天皇寶龜五年の草創トシ和氣道喜の建立と云
 故に道喜寺ト号ス然レ其後醍醐天皇延長六年勅ありて金藏寺ト
 改ム金倉の郷に有ら故に其境北に海ニ方ハトシて誠ニ迦葉尊者乃
 今定給天竺の鷄足の火洞に相似れ給と鷄足山ト稱シ原來智燈
 大師誕生の靈場と云故に往昔盛んたる時境内南北數十町東西十
 町あり國中第一の伽藍と云智燈大師唐土より見ゆ所の繪圖と云
 して飛驒の道其工妙と云く佛殿僧房をまはせし金倉寺乃

唐阿堂と申せしなり然れども建武天文の兵乱焼失し忽ち其跡
と亡し草堂古佛真影と納り置のむらりと寛永十九年 國
守伽藍と再建したる寺領と寄附ありせしれ再び四跡といひ
給ふと云

則四國靈場七十六番札所なり

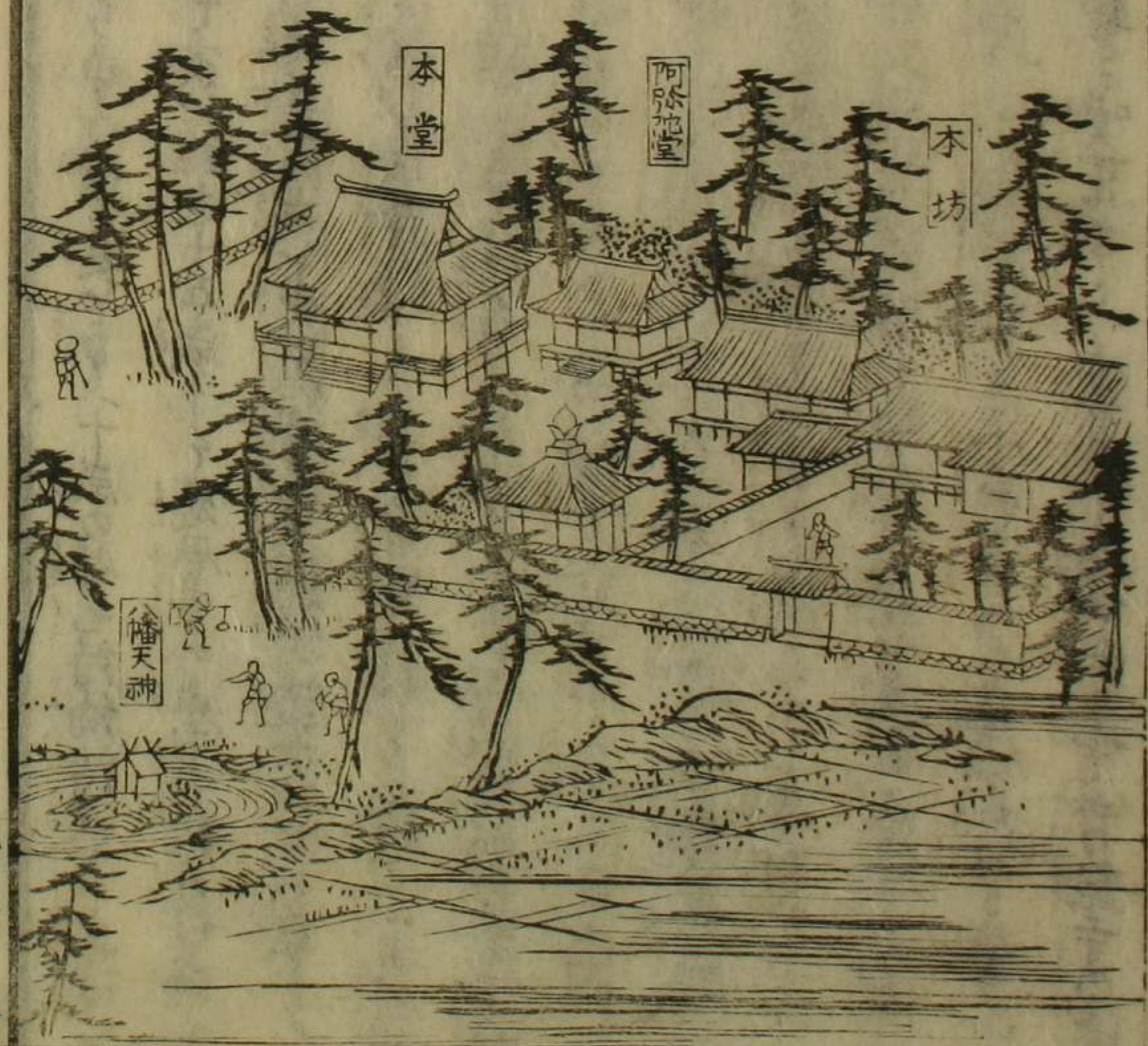
智澄大師自筆の御影 請來の曼陀羅 鏡鉢 十六善神 其
寶評 夢のつとむも事らげりまを覺る

抑智澄大師當郷の出生して名圓珍姓ハ和氣氏父ハ宅成母法伯
氏なり則ち弘法大師の姪子にありの其母夢ハ朝日口ハ入と見て
孕弘に一年ニ誕生し給ふ兩眼腫重項骨隆起て益と覆如
む性質敏く知れども老成の量あり八歳の時父ハ啓して白内
典の内因果經と言ひの有り願く我として誦習しめたること父

驚以異即ち尋の得て是とらふ十歳の時毛符論語漢書文選と續
十四歳して家と離れ十五歳して延暦寺の座主義直と師とて
事ふ十九歳の時菩薩戒を受けに明天皇寵遇盛なり廿二歳して南
都の明達と大義と決擇しやう其名朝野と播るる程ハ山王権現の
告固て奏を経て入唐に壽二年八月十五日福州の境小着く時に
唐の宣宗皇帝大中七年より用瓦寺小寓其中天竺の那蘭陀寺の
僧般若惛羅と逢て梵字米曇曇章と号す兼て金剛界胎藏界諸
の印法等を授り天台山上より此の石窟ありて其洞中小石を載
あり古智者大師説法の時これを槌て衆を集められ 法華の
とくても聲あり圓珍試ふ小石をりて是と打つ勢山谷小
震ふ諸僧驚と嘆せざるなり事なり又長安より青龍寺の法金

金倉寺

當山の河利帝母
 智燈大師在世
 再
 度出現の教法
 護持の誓願
 廣鎮
 橋の約談
 大師護法善
 神と祢号一洞と
 建を祭れせり
 給ふ所にて
 殊更のらぶ
 是よりして遠
 國々郷々より子と



金三ノ五

願い安産とあり
 りる懐胎の誓と
 求り又氏子とあり
 て名をい
 願ひ除病とあり
 極貴とあり
 福とのむおの願
 成せむとあり
 寺の縁起
 委しとあり
 祭月例月十六日
 大祭九月廿八日
 有信の貴賤郡遠
 て大ふら



錫(ゆ)の密旨及び灌頂を受けて、益(えき)行(ぎやう)底(てい)と倒(たふ)して是(こゝ)に授(たま)つて天
 安(あ)二年(に)高(たか)船(ふね)に乗(のり)て帰(かへ)朝(あそ)肥(ひ)前(まへ)松(まつ)浦(うら)に至(いた)り留(とど)まるとる夏(なつ)凡(およ)七
 年(ねん)得(え)る所(ところ)の経(きやう)書(しょ)千(せん)餘(じゆ)卷(まゝ)と表(あらわ)する貞(てい)觀(くわん)十(じゆ)年(ねん)二(に)井(い)の圓(えん)城(じやう)寺(じ)と以
 て傳(たづ)法(ぽう)灌(くわん)頂(てい)道(だう)場(じやう)の属(しゆ)圓(えん)珍(ちん)小(せう)賜(たま)ふ又(また)延(えん)曆(りき)寺(じ)の座(ざ)主(しゆ)とる寛(くわん)平(へい)三
 年(ねん)僧(そう)都(と)任(にん)下(げ)同(どう)四(し)月(げつ)廿(にじ)九(く)日(にち)逝(せ)り時(とき)年(ねん)七(しち)十(じゆ)八(ぱち)堂(だう)宣(のたま)て耳(みみ)目(め)聰(そう)明(めい)じ
 て食(じき)と物(もの)精(せい)潔(けつ)と擇(えら)ひ門(かど)弁(べん)阿(あ)闍(あ)梨(り)の位(ゐ)と受(う)かる者(もの)百(ひやく)余(じゆ)人(にん)平(へい)自(じ)
 剃(てい)髮(はつ)とる子(こ)五(ご)百(ひやく)余(じゆ)人(にん)延(えん)長(ちやう)五(ご)年(ねん)智(ち)澄(じやう)大(だい)師(し)と謚(し)賜(たま)ふ
 幼(よ)少(せう)公(こう)唐(たう)の時(とき)難(なん)風(ふう)暴(ぼう)起(おこ)り船(ふね)異(い)國(こく)漂(ひら)流(りゅう)以(もつ)圓(えん)珍(ちん)月(げつ)と因(よ)りて不(ふ)動(どう)明(めい)
 王(わう)と念(ねん)は時(とき)金(きん)色(しき)の(の)人(ひと)忽(い)然(ぜん)と舳(しゆ)先(せん)と向(むか)ひつる頃(ころ)更(さら)あつて順(じゆん)風(ふう)来(き)り
 羽(う)首(くび)福(ふく)洲(しゆ)小(せう)着(ちやく)岸(がん)以(もつ)別(わか)れり拜(たま)はる所(ところ)の像(ざう)と画(ゑ)を令(たま)して國(くに)を隔(へ)る
 よう以來(こゝろ)二(に)井(い)寺(じ)一(いつ)流(りゅう)の不(ふ)動(どう)尊(そん)は皆(みな)金(きん)色(しき)と其(その)余(あ)奇(き)特(とく)牧(ぼく)奉(ほう)とるべ



金色の不動尊
 難風と一がむ

永井清水

永井村のりう土人印の清水も其事詳う此井泉の地名と
永井のりうや道標に記せられたる泉にて四時とも湧き出し分て育の
本署に往還の旅客湯と同一く或西風をよむる冷て高ふ

醫王山身寶院甲山寺

廣田村のりう土人甲山寺のりう四圍遍禮七十四番の礼所なり

本尊 藥師如来

長二尺五寸座像弘法大師の御作本堂東む

御影堂

弘法大師の尊像を安んず本堂に並

鐘樓

門内傍あり茶堂

窟毘沙門天

大師堂の傍窟の内あり弘法大師の作厨子に記せられたる
山中に西國三十三所の觀音の石佛を連堂に

本坊庫裏

門内の右あり石橋 門前の川に流る

當寺に往首大伽藍として堂塔魏々として其跡
も夫も然まども本尊榴槲光佛大師の御作として靈驗尚ほあり

後山林鬱蒼と花の腰飾を見しと田畠綺のどく氏家相接ま

廣田池

廣田村のりう大朝比奈の池のりう傳言昔朝比奈孫と良と武とて討死
其墳地の中より故に泉湧き出たりと傳言するところあり

永井の清水

一道

松の影をまけ

清水 可也

泉に濫泉は泉沈泉のりう

爾雅云

濫泉正出正出者

從下上出也沃泉

垂出垂出者下出也

沈泉穴出穴出者凡出也

然ま此永井の水は所謂濫泉なり





金三八

我拜師山延命院曼荼羅寺 剎有村より四圍遍禮七十二番の礼所あり

本尊 大日如来 長二尺五寸三像 弘法大師作 本堂東向

護摩堂 本堂に並ぶ 大師堂 本堂の南に隣る

鎮守権現社 大師堂の南あり 鐘樓 大師堂の向 茶堂 鐘樓の北の傍

二王門 北向門内兩側櫻の並本より 笠松 本坊の前より圍凡廿余間

西行笠掛櫻 鐘樓の前より櫻の下小標の石を立て西行上人の哥と勒り

四國のくまらへゆりりり同行の都へかたりりり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

かゝりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

金三ノ十元

山あはれ ひとへにみだりにゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

都へかたりりり同行の都へかたりりり

寺記云 此寺の碑云々ありゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

當寺弘法大師善通寺後感の後建年自ら七佛藥師の尊像と作

つゝ金堂に安置し給り彫楹玉臺日宮と引て給は我龍象林とややうこれ

は元景に海成尊の名徳寓居し給ひ秘教行揚の道場を結して高遠の

勝區のり中世にむく兵賊ありて寶篋形牆魁魁の棲しむるも

の監察生島氏の家臣に野の何げとてやとれと見て感慨したるに

二間の佛宇と造營し俸田數頃と割り寄附しゆりゆりゆりゆりゆりゆり

繼て遠く絶絶とて維ゆるる凡此境や金城北よ峙らば野崎乃

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

曼荼羅寺

傳云

大師善通寺と建
て後又此寺に建のふ
小金胎両部の曼荼
羅と地村此堂
と三薬師七軀と姜
置一の故曼荼
羅寺と号す

道通院

これとんく入とて

ゆきハ

山ゆつ 松ありと

号す 寺



金三ノ廿一

千載集

世とすらみ跡ハ

むうと

かひと終と

なとん

時とと

とと

海平定長朝



二町四角林木繁蔚して清幽都て葦夏と忘るるなり

此寺元景仁海威尊のこゝ名徳の遺跡といひ傳ふ彼小野の寺と曼荼羅

寺延命院ありと彼此異なり小野の寺あり正行院ありと今公寺

大師御建皇の時今の名あり小野の寺も此寺の名と取る也

我拜師山出釋迦寺 曼荼羅寺の真院あり三丁計曼荼羅あり七丁二番の靈場の前北

本尊 釈迦牟尼佛 弘法大師の作秘佛なり

大師堂 本堂小並ぶ 茶堂 門内の左より 鐘樓 門内の右より僧坊

鳥の札所と言ふ十八丁上の絶頂ありと然る此所堂舎あり其道嶮

岨とて諸人登るまじ得び故に後世此所寺と建ふなりれと傳むとぞ

捨身を嶽 山の嶮に所あり大師の御時未法利生の御試とて變て豊良

世坂 峯に登る嶮路といひ諸人杖とあげ岩と取て登臨し

山家集

はんごうの行道とていふは大師の御時

やうあり大師の御経かきとてうづやせれとていふは山の嶺

ひうとていふは二丈とていふは杖とて建らまると夫

日毎に登るせせせとていふは行道とていふは杖も二重とていふは

とて登る程の長さを杖とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

わづらふとていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

杖拜師山のていふは大師の御時未法利生の御試とて變て豊良

釈迦如来出現しとていふは大師の御時未法利生の御試とて變て豊良

やがて夫が上大師の御師とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

とて登る程の長さを杖とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

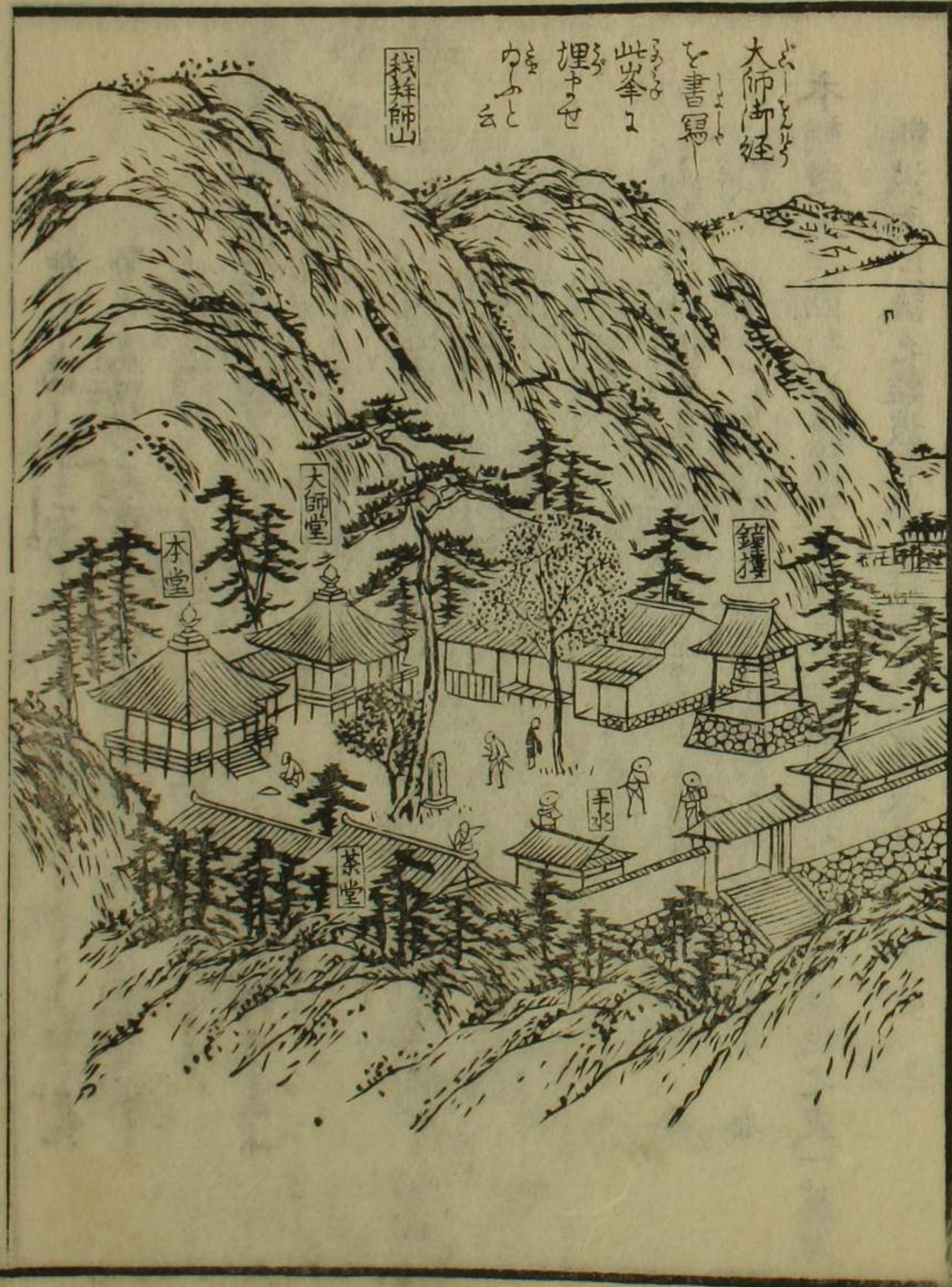
山上あり今其跡のていふは西行のていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

仍道所とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは

大塔持留趾

山家集

仍道所とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは杖も二重とていふは



大師尚経
 と書寫
 此山ニ
 埋ヤセ
 わき
 云と
 我拜師山



出釈迦寺
 新樓古今
 乃わも又
 つるも
 山に
 越も
 雲の
 の相
 の
 後宇多院

曼荼羅寺より此野出る

抄く海しるおのろく一塔のつとてくくもくもく
 けり高路の大塔くくくくく塔のつとてくもくもく
 うづくたもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

護摩壇古趾 大師護摩供修行のい一趾と五穀の灰のつとて

中山 我拜師山いあ五岳の其一なり

水笠の岡 曼荼羅寺より二町西より西行法師寓居の舊墟あり今尚
 草庵あり 西行上人の像を安んず拾遺の篇に委し因し出れ

山里にほせしとんもくもく悔しとるく昔はくん 西行
 山里と人来る世はくもくもく同くまを味くありゆ 全
 山里のむけあしと思ひく苦くくくくもくもくもく 全
 教のゆきもんのおくくもくもくもくもくもくもく 全

本朝遷史曰西行以在讚州身度之菴而所詠之山里待厭世之友一篇波
 難波而所詠之難波春夢蘆枯風度一篇後惠深歎美之云

水笠の岡

小町能因の徳と
 りて雨とあせ世之
 と此聖いよる雨と晴せ
 一妙りく世余を人
 生涯のるり身れ奇端
 奉て牧之りて



西行上人五音幸忌
 連翹や
 この屋の
 日と
 ろか
 りき
 胡友

山家集

これと國々大師の如く侍りては此の世に

く住まひては海に身をまかせしは

墨もあはれく海の月をればは水の地を

住りては此の世に

今もいづくに命あまきよきか

治承二年の秋より四年西國修行の暇に

造りのり其末壽永二年正月廿二日

此善通寺に在る久の松乃庵に在る所なり

水草の岡の湊

同所の湊に昔は海に舟を繋ぎし

萬葉集 天霧相日方吹羅之水草之岡水門爾波立渡

天王子といはる弥谷の山上天雲の

水草の岡は湊乃波よりも筆の海に

金三ノ七五

本朝通紀前廿五日保延三年秋八月佐藤兵衛尉藤原憲清遁世

憲清者武衛校尉康清之子藤秀卿九世孫也達子馬之藝又讀書典有

螢雪之勤且習管絃工和歌曾出奥州郷里到京師奉仕鳥羽法皇法皇

以憲清任左兵衛尉為北而之衛士每應制獻和歌息遇日渥然憲清素

有避世之心不屑恩寵一日憲清從弟佐藤憲康者携手退去憲康語憲

清曰余先祖秀卿征叛夷以朝廷之藩護其餘慶延至于我濟而朝息捐

厚然人間之榮耀不可久特彼山林之下豈無所係慕乎憲清感泣而相

別明晨憲清為候鳥羽院往扣憲康之門門外人聚戶内羣悲憲清問之

家奴曰昨夜主人俄没其母七十歲其妻十九歲憲清大驚彌催哀念乃

將遁世而自謂不拜恩君遁世者於我無嫌也直到鳥羽殿先陪御遊之

席而後奏請出世聞之望上皇不肯容憲清不得止歸家脫冠刀終出家

改名於圓位其後改名西行親近之家人亦出家相從號西住西行情不
 遙富貴不阿貴家慈周遊天下無名山景境不歷見之地皆以詠和歌自
 樂風花雪月皆以自詠遺興西常謂和歌者禪定之修行也我由和歌得
 佛法西行將赴關東芒鞋竹杖到遠江國天龍灘寄身於武夫之舟舟中
 人尋將蕩翻呼曰僧等可自舟下西行之曰借舟之便者旅僧之常不退
 一人怒以筆扣西行頭出血西行無少恨憤優然下舟而去西住見之泣
 西行之曰余出塵固知如斯之事不虞之禍猶有大於此何爭乎汝且歸
 鄉西住不得止東西相別自是西行獨步益縱行脚

一書云西行聖人俗姓藤原氏從四位上鳥羽院の下北面左兵衛尉義清と
 号又則清憲清も書あり然る義清の訓儀一同トクバ
 然る下と義清と訓義清決るとは一夕結見へも義清書て

義訓と説謚と然る職原大令上北面諸大夫四位五位任之是
 今鼻殿下北面侍之官也草菴曰禁中權院泰而為下北面候武者所
 法名圓位千載集大實坊号一亦西行と名づ新古今集
 載此名

○大職冠鎌足公 不比等 房前 魚名
 河辺左左臣 正二位

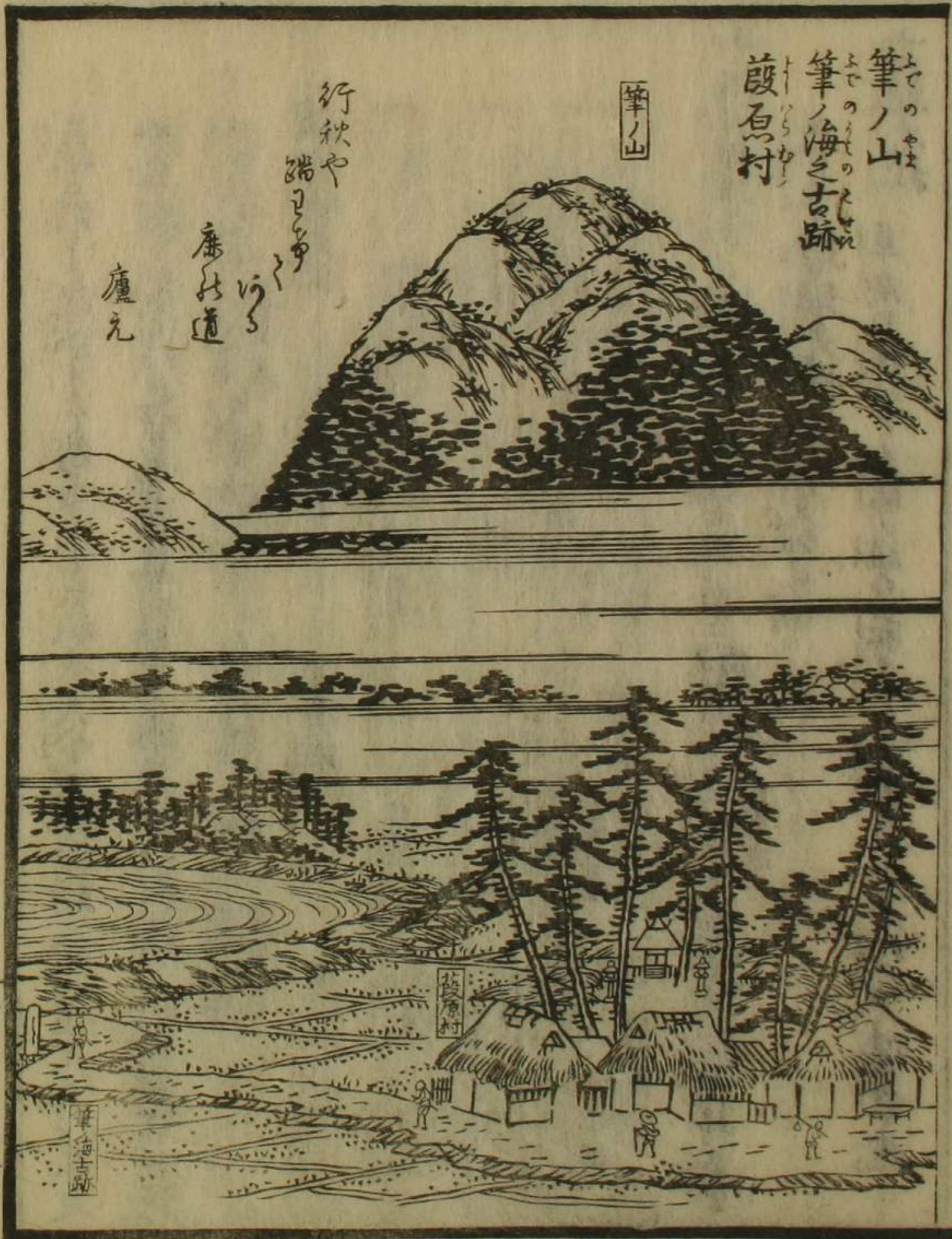
藤成 伊勢守 伊守 備前守 村雄 左衛門尉 依藤太
 從四位下 從四位上

千常 從五位上 文脩 將軍 內舍人 文行 左衛門尉 公光 右衛門尉
 將軍 從五位上

公清 宮内左衛門尉 李清 左衛門 康清 左兵衛尉 憲清 下北面
 從五位下 西行

七佛藥師堂 葭原村於慶の池の傍の草庵 堂あり観世音弘法大師おを
 本尊 瑠璃光佛 弘法大師の作
 古驗之松 草庵の傍あり大師の植り亦して靈驗ありと松の下標石を建

筆ノ山
筆ノ海之古跡
霞魚村



行秋や
踏石
庵元
庵元道

筆ノ山

金三ノ九七

於婆池 正字未詳 七佛薬師の堂の後二面の大池 恰も湖水のごとく 国中大池の其

鳥坂人面石 榎戸野村鳥坂の山中より高凡二丈許巨巖懸掛の人面の如し

花立碑 鳥坂の里端を往還の傍より碑銘畧し拾遺の篇に委く着け

頼政箭止松 此道條は薩州通行の街道とて人馬往来平生小休に 廣田村あり其事実詳し

榎戸野池 榎戸野村あり大池より天霧山向うに望む

釵五山千手院弥谷寺 大見村あり四国霊場第七十一番の札所あり

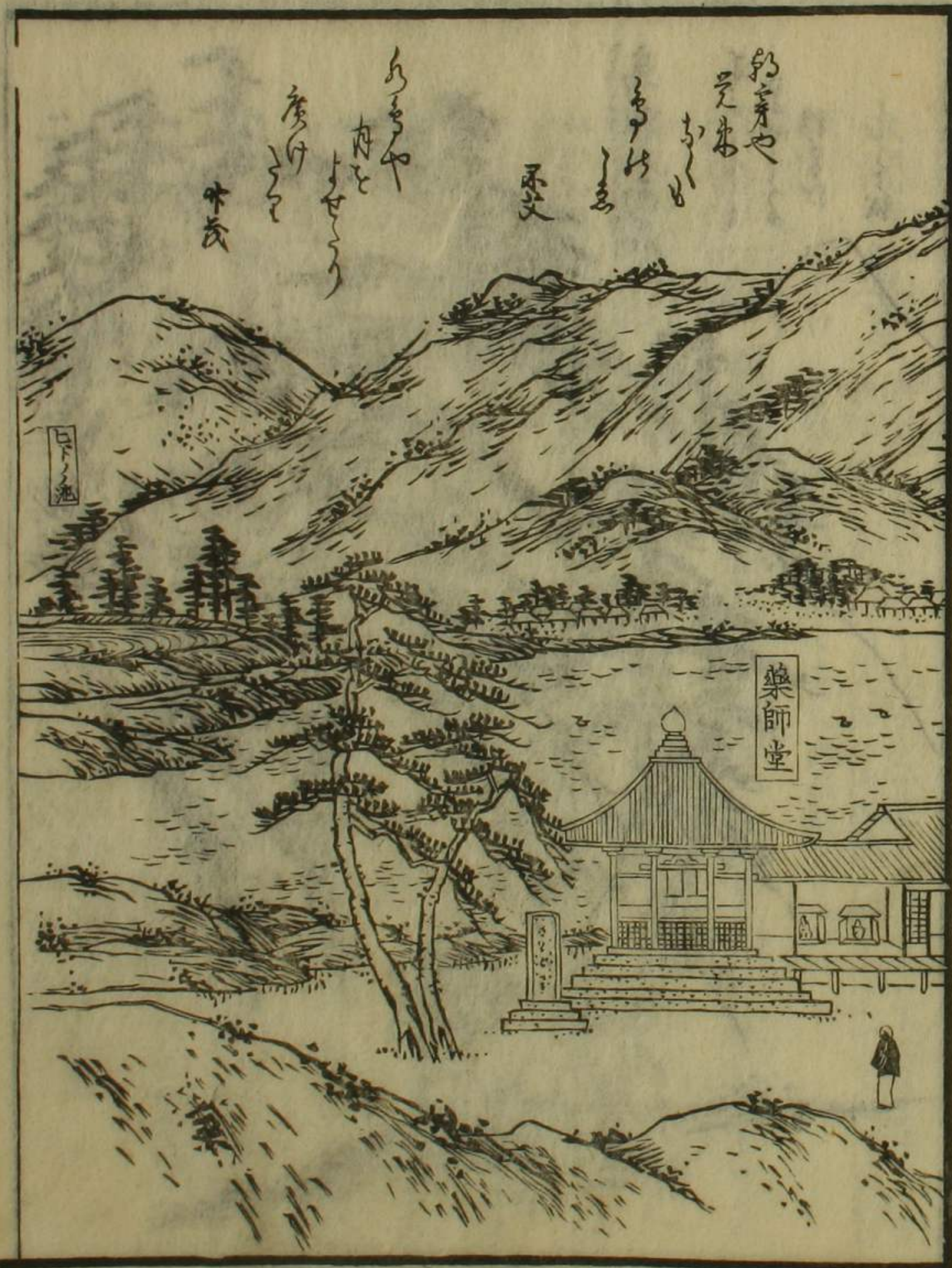
本尊 千手観世音 長三尺五寸立像弘法大師の作大悲圖の左に弥陀と號し

脇士 不動明王 毘沙門天 右同作あり

護摩岩窟 崖腹に穿ちて護摩檀の洞あり石壇の上より不動弥勒菩薩

道範阿闍梨之像 右窟内の傍より是は範師此国に配流の時當寺

の住持の所望よりて行法肝要抄を撰せり此像の書の奥書にあり其住持あり此像をまつておけ



金三ノ廿八



鳥坂人面石

あつゝ
とく
杉
くま

永間特巖窟 奥の山にあり九ノ二の岩窟あり内四面の岩面ハ五帶窟空
 藏地藏木と彫刻ハ又大師の御西親擬らまよとて弥陀弥勒の
 拜堂 南面あり 石像と安んず人々をまら西親とて拜ハ

三尊弥勒佛 本堂の左の巖を弥勒三尊堂子の名号九行大師の御筆なり

藏上権現社 護摩岩窟の左の山より長凡八尺計大師の作則ち當山の鎮守也

加持氷籠 護摩堂の右の方あり 氷祭納骨所 共ニ籠の下あり

辨財天祠 籠の上の方あり 降叙所 籠の上あり五柄の叙字あり
 降りてを踏むなり

二本杉 籠の下あり 天神社 権現社の下あり 鐘樓 護摩堂の下の方有

十王堂 鐘樓の向ふあり 観音堂 西國三十三所の尊像と安んず十王堂に
 観音堂よりよ弥勒親迦の二佛と安ん

中院 洞地藏尊洞薬師佛 方あり

茶堂 方丈の門前あり 法雲橋 灌頂の渡り 手掛岩 法雲橋の傍あり

二天門 持国天受門天と安ん 二王門 金剛神の西尊と安ん
 本堂より三行下者 二天門の向ふあり



金三ノ三十

比丘尼谷東院之旧址 権現の社の東あり 瓶岩 二王門の上の山腹あり其形似くるとして号く

水谷 二大門の前の流の水源より 穴薬師堂 川の向やうり

生駒彦石塔 名号石の岨より 籠軒 石塔對り 納經穴 本堂の右の方にあり

山崎俊家石塔 山崎志州祖母石塔 大宮四良右衛門石塔 共本堂の西あり

香川家代々之墓西院之舊趾 右小同 獨鈷坊古跡 茶堂の下の上カあり

栢當山入皇四十五代聖武天皇の勅額行基菩薩の開基して弥陀釈迦乃二

佛安置蓮華山八國寺と号し蓋絶頂に登れば八州一望と云ふ故にそ

然其後弘法大師此山に登臨給い求聞持の法と修しひる小虚空下り利

氣五柄降し金色の光赫と藏王権現形と現し大師去給し廿六世乃如

来説法の地觀在薩摩度生の初る菩薩願が千手大悲の尊像と造り伽

藍再尊りて秘宗の法門と開し普く無福の衆生を救ひぬ我も又法味とありて

鎮守守護せん盟約ありり大師すまら千手大悲の尊像と造り新精

舎と号し給い且藏王権現の形像と彫刻し鎮守と云給し寶釵五柄降る

以て釵五山と号し又釵の御やうの五の音同なる大師窟と穿り佛像

と彫刻し或巖石に阿字と鐫し五輪塔弥陀と尊大日等とありせり其余

名号釵形宮塔形まのころに一山有るころの怪岩奇石あり五輪佛

跡と目接る物足の趾と云高峯深谷に至るや不思儀の神跡あり

と言ふ故に佛谷佛谷とも凡當山嶮崖崖鬼と云々幽迴して隣

おれど彼霞と服風一駕と云人ありす唯々此に至らんや雲霧常

一起と灵木異草盤々岩端泉流し清精神凄然として嗜欲更し消

将つて一八靈寶若千ありとも教回兵乱の爲に失しなるとる物

多々此就中一奇の灵寶は大師所持の紫銅の鈴あり圓四天王乃

像と彫其間、心之賄、拜するの唱、歎せしむる言、是は尚此余、是と
畧にむ、監僧坊、亦も兵火、焼失、且、享保五年の春、火災、ありて、焼亡
以、今、東院、西院、お、其、旧趾、の、蓋、傳、云、此、峯、の、登、臨、と、時、八、州、一、望
と、ら、故、八、國、寺、と、号、し、る、何、ぞ、の、時、り、孫、谷、と、書、お、い、せ、う、これ、
全、く、孫、や、の、音、より、して、八、の、さ、よ、か、國、の、音、同、と、さ、ゆ、お、り、り、或
云、此、後、後、世、附、會、の、説、お、ん、孫、谷、山、の、俗、号、り、て、二、朵、の、峯、東、北、西
一、時、り、溪、谷、孫、の、妻、お、る、故、り、孫、谷、と、よ、ぶ、孫、生、孫、猛、の、類、い、る、下、と、

天霧山

孫谷山の良、一連、高山、あり、香川、信景、の、推、籠、る、古、城、の、跡、り、孫、生、出、丸、乃、
與、合、戰、の、旧、跡、ま、り、委、一、拾、遺、の、表、一、著、也、

本朝南海治乱記云香川氏其祖鎌倉権五郎景政より出て下総國の姓氏也
世々五郎と以て稱し景とありて名は細川頼之より西濱の地と揚つて
香度郡天霧山と要城と云度津に居住せりト又香度之野豊田郡の

主、六、香、川、氏、り、居、城、香、度、津、雨、霧、山、也、ト、云、
同書此雨霧ノ城と云、險阻の高山、りて、大手の路、馬も上れば、大身此
山城あり上の分内も、廣くして、大岳も納べ、水、澤山、りて、早魁と
も、之、り、か、く、險、要、の、名、城、り、ト、云、

天正二年冬香川兵部大輔元景織田信長、叛徒、幕下、候、せ
ん、復、と、云、信、長、悦、喜、斜、め、り、使、者、の、演、説、と、同、給、い、食、雁、を、
給、明、日、報、答、あ、つ、て、香、川、元、景、一、や、め、賜、を、信、景、と、攝、氏、
天正七年香川信景土佐の長曾我部元親と和平、調ひ、元親の次男五
郎次郎と濱州、呼む、養子と家の女子、妻、せ、誓、儀、と、調、本、城、と
渡、り、此、時、と、云、香、度、津、之、野、豊、田、一、那、珂、郡、と、如、て、四、郡、の、主、と、り、其
所、柄、も、豊、饒、り、て、衰、乱、の、世、と、り、も、自、余、の、兵、將、一、裁、り、り、と、云、

香川長曾我部和親

天正七年の春天霧
の城主香川信景
土佐の長曾我部
和幸とは香川方
の質として香川山
城守河田七良兵衛
同孫太郎と野菊
右門四人の家老
と二人と土刺番
代々結し信景も
岡豊の府出仕あり
て太刀馬綿



金三ノ成四

細木のまゝ進
せらる元親も
別て用いらま
餐も正式の膳
部能し舞水
りう五音
洋留
あつゝ
飯国の
よの國分
茶を
とらて
送り酒
逢いあり



天正十二年羽柴秀吉四國征伐よりして香川信景歎一がて養子
五良次郎親政の縁に随ひ雨露山の滅と去て土佐國に引取とて

天正十五年八月生駒雅樂頭正規讃岐國に賜る其頃生駒讚岐守正召出

侍士の内より野菊石門河甲良兵衛の兩人香川信景の家よりて名

高き勇士と名をとり抱りて西下りて男子數多りて是に分ちて

又天正十四年豊後の大友援兵の時長曾我部信親十河存保と共戦死を致し

香川氏部少輔とては是の雨穿の城主信景よりあり北條の香川あり

勝間石塔 勝間村の田圃の中より高凡と丈許十と重し積り土俗に弘法大師の作と

本山寶持院長福寺 本山の庄より故に本山寺とも号し靈場七十番の札所

本尊 馬頭觀世音 長二尺五寸弘法大師の作

照士 阿弥陀如来 薬師瑠璃光如来 右同作

金三ノ五

御影堂 弘法大師 本堂の右の向あり 茶堂 大師堂並に接待所あり

大塔跡 本堂の右の傍あり小堂と建る 十王堂 大師堂に隣り十王并に此

鐘樓 大師堂に隣る 庚申堂 青面金剛童子と安ん 五所権現社 庚申堂

二王門 金剛力士の像と安ん 银杏枯木 十王堂の傍より至りての大木と云ふ

無垢淨光陀羅尼經曰
造石塔功德有七種
一、千萬歲生天官
二、得長命、三、得那羅延力
四、得千萬歲內國王位
五、得遠離生死身、金剛不壞身
六、得三關六通果
七、得四十九重寶殿





當寺ハ大同年間弘法大師建之の伽藍にして往古六七堂魏々として居り
 天正の兵火かゝり悉く焼失然るも本堂六恙なく存する故に
 今安躰り境内に老松の大樹枝條枝疎して幾世と経るむ
 問ふにたゞりや本堂の後古き五輪許りの事實詳るるれども
 遍年の古物らるる前長流の川あり二門とて觀音寺に到る街道
 本堂前の腹の門は弥各の通路蓋此地と本山の庄といふ此より海辺へ
 七里の岬りつて其の本なる故に是れと則ち海岸の端と箱の岬といふ

高良神社 本山寺の左に並ぶ當村の生土神と
 祭神式内大日靈命
 本山寺之古楹 本山寺より三計東田圃の中より本山寺建立の遺造り一柱ありとて里
 の境區々も祥多あり然るも千歳の古物といふ
 七寶山普門院神照寺 植界より俗に植田の天神といふ本堂南向草庵東に向ふ

本尊 觀世音菩薩 天神社 本堂に並ぶ 辨財天祠 天神の社に並ぶ
 菅公と祭る

天神之松 神照寺の境内に枝條と偲は俗に植田の松といふ

樹の高五丈余幹の太さ壹丈五尺廻東の枝廿五間余西の枝十五間
 南北之枝二十間余年々繁茂して枝毎に数本の束枝と立て是と
 互に實や泰山の松樹始皇の雨と禦とて形勢も想像するの大木
 かり往返の旅人あり來つて賞美せむといふ支あり

本山寺之古楹

土中と出る凡五尺余首一
 柄と納む鑿あり木八正
 擗る下本山寺建之の残木
 ありと言傳ふまじも何の故と
 言ひし詳るるは都會の地といふも
 彼長柄の橋柱のあり言ひても一奇の希有り





雅親

かきく
あはれ
河川の
まて
松の
かきく
あはれ
まて



植田天神之松

めくろ
さくろ
松の
新橋
かきく
あはれ
まて
あはれ
まて

金三ノ卅八

琴彈八幡宮

観音寺の庄より霊場
第六十八番札所なり

社僧 観音寺

委しく好し記に

本社 應神天皇

大寶二年豊前国守佐より御遷座

高良社

武内大臣本社の右に並ぶ

住吉社

住吉三神本社の左に列る

若宮権現社

住吉の社の南にあり

大師堂

弘法大師の安ん

鐘樓

本社の階下あり

九重塔

石を造る鐘

中之菴

山の半腹にあり

龍宮風ノ宮

中之菴の向に並ぶ

天神社

中之菴の鹿嶋神社禁の岨

一之鳥居

簾の板にあり

二之鳥居

山の半腹にあり

宿居

一之鳥居の北の傍の芝原

例祭八月十五日神輿此方一渡御のしむ年

十王堂

宿居の傍にあり

下ノ菴

十五堂のくまにあり

梅腋の濱

此所の濱にあり

當社八皇四十二代武天天皇の御宇大寶二年豊前国守佐の宮より八幡大神宮に移らせ給ふと其時之夕日晝夜も西方に天鳴動し黒

雲おひ日月の光を隠れ國及あやしく如何なる更と守づる所一西方の空申より白雲虹のやほれ當山にあり終りて此山の麓梅腋は海濱一一艘の怪船あり中一琴此音ありて其音美妙し嶺に通ふその頃此山止住の上人あり名を日澄といひ此上人船に近づくといふる神人にて在れば何事と云ふ此の事と給ふと問答て曰我は是八幡大菩薩なり帝都に近づき擁護せんが爲に空依より出此地是らるが故に遊び上人又曰疑惑の凡夫異端と見ざれば信にぞ希く遇迷の人のことと靈異と示し給へ然るに其夜忽ち海水十有余町の程緑竹の茂藪あり又沙濱十歩余松樹の林とらまう諸氏此奇怪と感嘆せざればいざり上人郡郷に觸て十二三歳の童児の欲深かその数百人と集むる山の竹乃谷より御船と嶺を引あげ齋紀し琴彈別

宮跡奉る御琴并び御船今殿内崇り奉る尚奇怪の靈天教
回の事ありしん則ち此船神功皇后異國征伐の乘舟に據艦
ありと言傳ふ蓋八幡の御莫朝家の御宗廟にい別して異國降伏
の灵神あり故に當宮西海に臨給其武内大臣任吉明神若宮權現
の祠とて七十五神の伴社山中に充滿し中にも青丹明神と以
て上首と此山岩密崎嶇して三方に滄海渺々山嶽此神秀吳
仙の窟宅と祈りて半腹一華表と立林藤石の鳥居あり近世勅
額と給りしる縁起樞中納言實秋郷の筆として足利將軍此神あり

什寶

御神琴

神功皇后御遺器大宮二年自豐前国宇佐宮御遷座之時船中
御愛撫之靈琴今猶存當社第一之灵宝最海内一品也

御船之靈材之箇

同時御着岸之御乘船残木也

右御船往昔より寶殿に納りてあり所享保廿二年丙辰春二月八日の曉
災火に罹りて燒失れ然れども其材之箇今も燒く能はばして今も存
琴彈八幡之所大菩薩御垂跡御縁起云今此御乘船是神功皇后異國征
代之時自然出現之兵船也云

又曰出現一艘船是非人倫之造非化人作竜宮出現之兵船也即不論水
陸虚空神通宝船也

古鏡 一面 神代遺品 神功皇后御愛物

右の突鏡上古宮殿の裡に於て失く然るる數年を歴て二十三世僧
正高源兼元四年庚午にこれ地中に得たり上代の國を以て是を
合はし遠く又重量も同しこれ依りて神鏡とて知る最威験あり
うり故に其地を号して鏡の地と云今末院の地内にあり院号を鏡照院と云

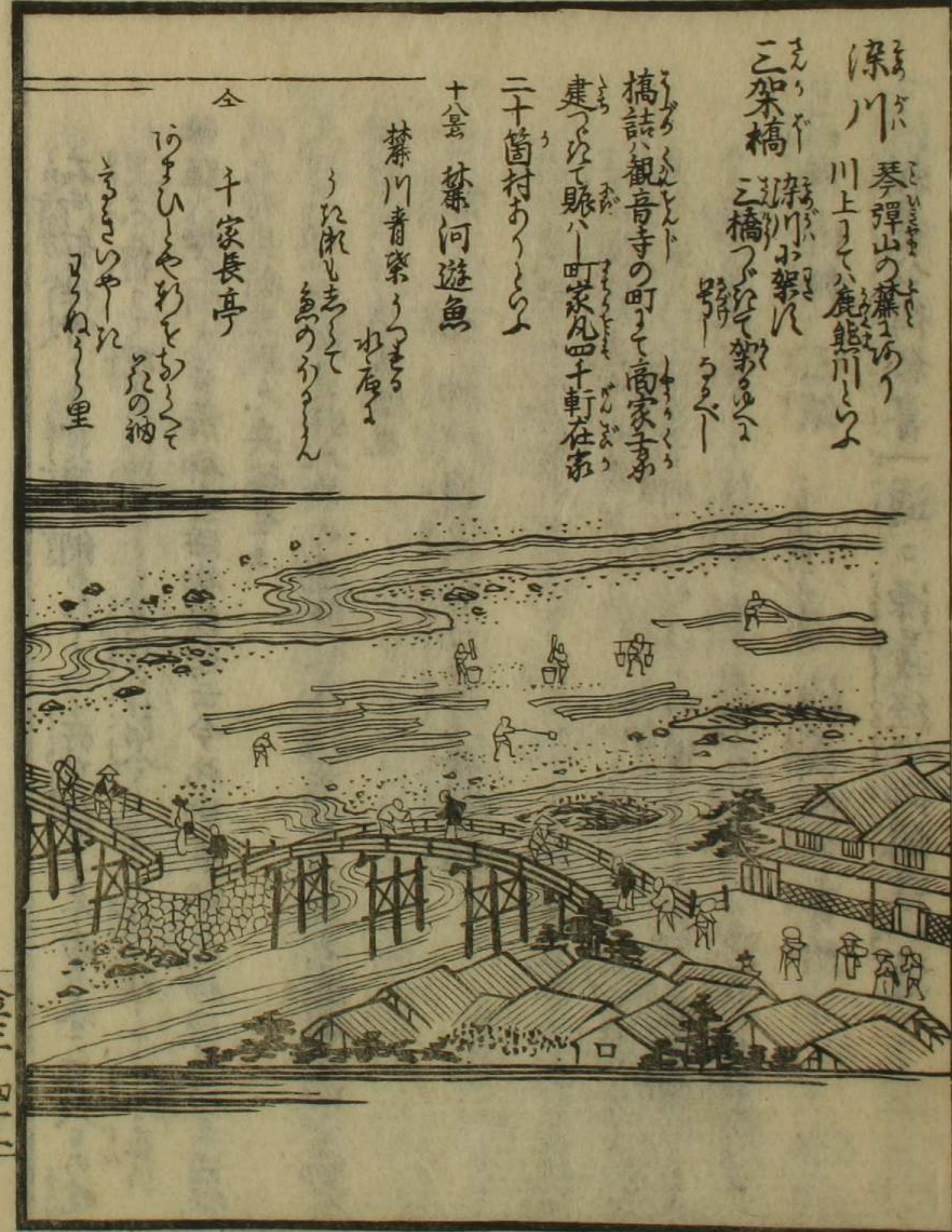
三所御劔 三振 三条宗道作 源義經公寄附

源頼義公御願書一通 源義經公御願書一通



橋下の河原に
在るうすまを
て細布とよむ
まゝに

橋人の
執は
赤や
白
楚日



深川 琴弾山の麓あり
川上より八鹿熊川より

三架橋 三橋つらねて架る
号 ちんちん

橋詰観音寺の町と商家あり
建つて賑は町家凡四十軒在る

二十箇村ありとの

十畝 禁河遊魚

禁川青紫うづま
水原

うづまもあつて
魚のうづま

今 十家長亭

うづまいゝやれとあつて
たの袖

うづまいゝやれ
うづまいゝやれ



金三ノ四十二

○長刀一振

及長二尺五寸柄長五尺六寸

天平勝定元年十一月廿九日諫議大夫石川年足奉納

○地藏菩薩画像一幅

香川中務信景奉納

○菅家御筆

五通。嚴有院殿御條目一通

○三千佛名經

足利三代將軍義滿公御筆

○大般若經

壹部六百卷 後鳥羽院勅筆

料紙長二尺五寸 文字行長八分

觀應二年辛卯二月廿四日琴彈神寶目錄記之 細川頼之寄附

○法華經一部八卷

並開結二經 大江中納言匡房郷御自筆奉納

開經ハ無量義經 結經 普賢經 五色料紙用之

○琴彈山繪圖一幅

土佐將監光信筆

○七寶山縁起

征夷大將軍源朝臣（花押） 右義持卿あり

金三ノ四十三

奥書云應永廿二之曆仲春下澣涖疎毫訖

推中納言藤原實林

又云

此一卷者古來當山所傳縁起也今令按察使 前中納言新寫且手書外題以奉納八幡宮神殿

昔延享戊辰夏六月

（花押）

琴の松風（花押） 春を振（花押）

勝地探奇古祇林 松風颯々似調琴

費晴湖

范々滄海波如雪 疑入蓬瀛隔水深

進みたる室をまゝに改りしは後代の徳と
よきや人の徳と

發志日詠

毫採帝可貴南羅志都々玉琴懷志良辨曾免

計理教迺室遠

小林某

夫此山は三方にひびけて、海と見え、一帯は有明の濱と呼
 て東西數町の間に二面の真砂地、て山の裾に、ては一株の松、
 れも恰も畳敷の如き、破辺より山路も海に對して、本宗
 風烈、て松のつら、高き、びに地、偃て、這々如く踊る、
 其形勢、異る、て、原米か、松の、て、小柴茅、萱の類、も生
 せ、洗ふ、如き、砂山、も、其美、是、る、て、言、絶、て、松、入、向、て、極
 の灘、伊吹大島、と、り、吉備の山、中國路、九州、も、も、見、雄手
 豫州の山、嶺、と、雄手、一、橋、積、秩、又、峠、箱の岬、江浦山、澳、を、行
 船、湊、入、舟、破、て、引、細、浦の釣、船、衝、鷗の飛、も、も、皆、此、山、の、風、景
 として、殊、更、を、あ、り、有、明、の、月、の、夜、あ、る、の、眺、望、一、須、磨、も、明、石、も
 中、く、及、び、が、て、て、想、像、を、い、ぬ

象ヶ鼻

社頭の東北、て、山、の、端、あり、山、石、の、か、ら、象、の、鼻、の、が、故、号、す、此、山、
 より、海上、に、眺望、する、は、風景、言、絶、し、絶、れ

問答石

宿長、の、西、の、山、の、す、ま、り、り、日、澄、上、入、幡、大、菩薩、と、同、各、一、の、い、跡、あり、云

二本松

有、明、の、南、より、古、松、あり、北、谷、社、頭、の、北、の、各、向、より

七寶山觀音寺

琴、彈、山、の、半、腹、より、則、神、宮、寺、社、僧、あり、四、國、遍、禮、茅、子、九、番、の、
 座、像、の、長、二、尺、五、寸、弘、法、大、師、作

本尊 正觀世音菩薩

座、像、の、長、二、尺、五、寸、弘、法、大、師、作

愛染堂

本、堂、の、向、ふ、より、愛、染、明、王、大、師、堂、と、安、い

西金堂

正、面、磴、道、の、上、より、大、三、藥、師、如、來、と、安、い

室塔舊跡

藥、師、堂、の、右、より、遍、照、塔、寶、塔、の、四、趾、並、ぶ、小、堂、あり、柱、の、左、右

弥勒堂

正、面、弥勒、菩薩、と、安、い、右、に、毘、沙、門、天、王、左、に、開、基、日、澄、上、人、の、像、を、置、き

太子堂

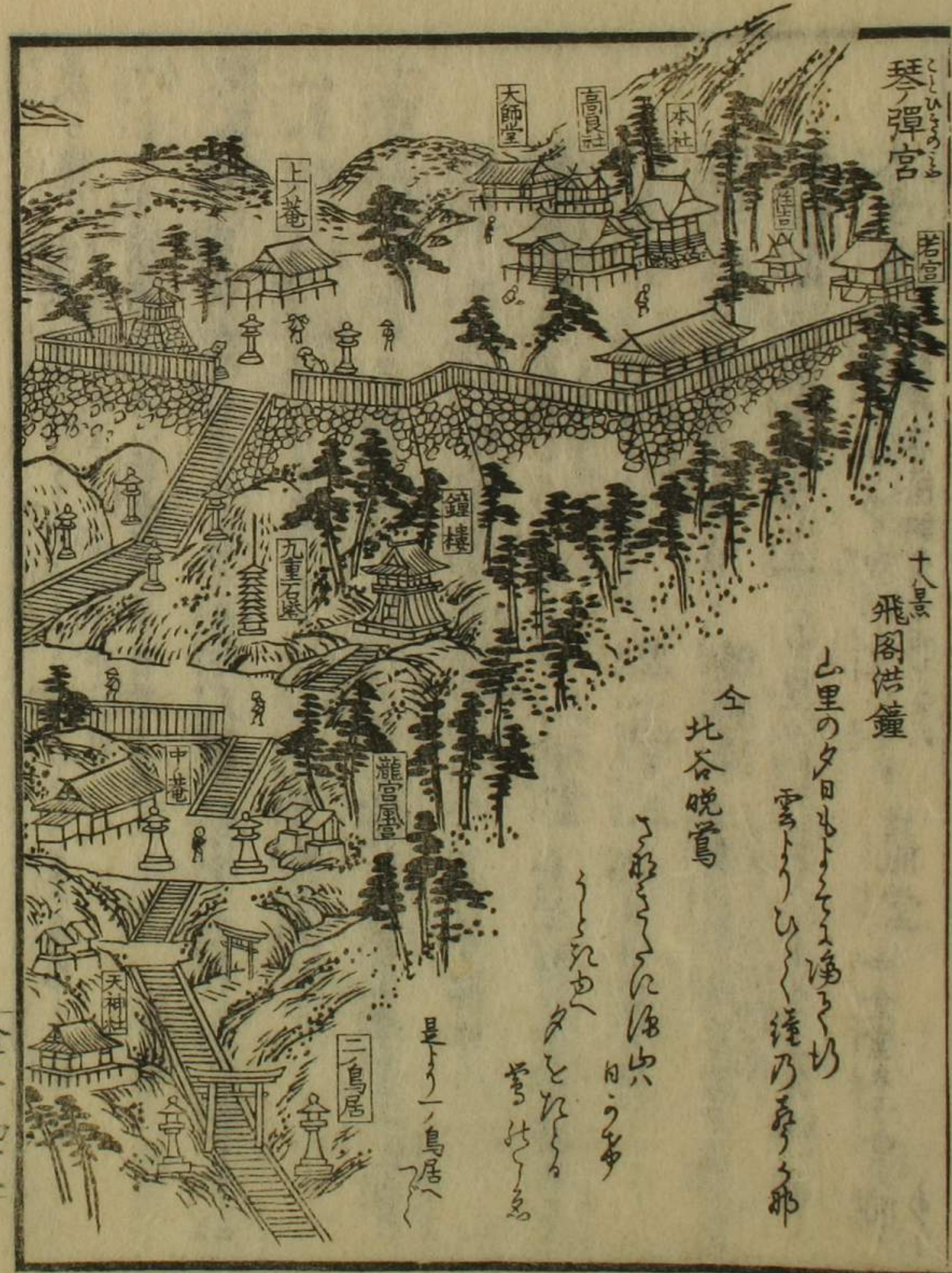
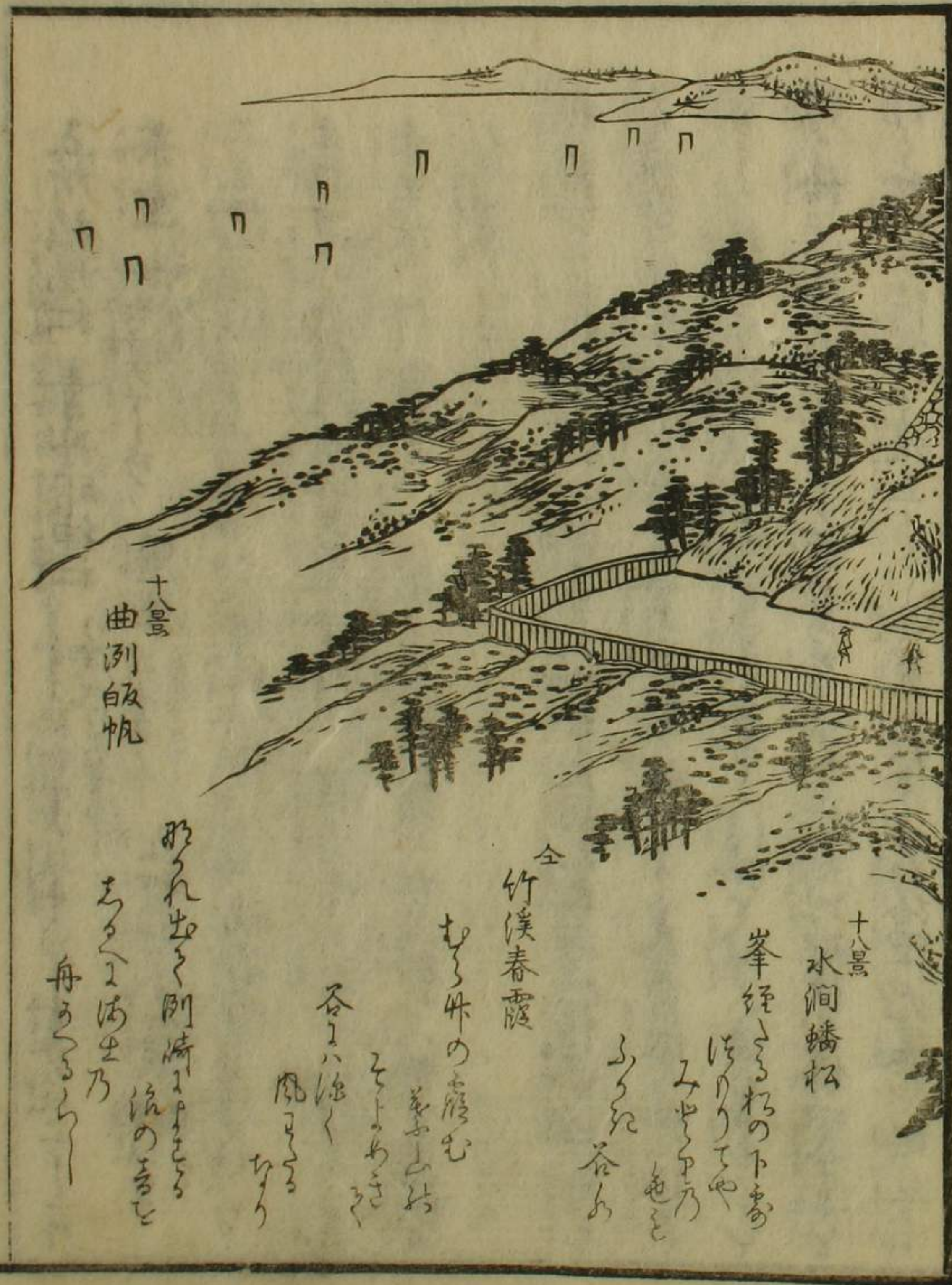
弥勒、堂、の、右、より、聖、德、太子、と、安、い、地、藏、菩薩、訶、梨、帝、母、と、安、い

竹溪

宿、居、の、西、の、山、方、より、舟、舟、と、引、上、り、古、跡、あり

竹龍堂

中、金、堂、太、子、堂、の、間、に、あり



五所権現社 青丹明神社 の併社の上首より

茶堂 弥勒堂の下より 鐘樓 茶堂の左 五智如来石像 愛海堂の傍あり

二王門 南面金剛神の西像 天神社 二王門の内西 稻荷祠 同東の傍より

本坊方丈客殿庫裏寶藏倉庫木ハ観音堂の向より惣せり其
余末院六坊惣門の内より連り且金毘羅の社生眼の八幡宮天満宮

ホ此坊中の境内より

押當寺久皇五十一代平城天皇の御宇大同元年丙戌弘法大師唐土

より醍醐の後琴彈宮へ詣り賽の法施給ひりて大菩薩の御純宣此

寺より此地に寺院を營り神宮寺に常は法味と八幡小進を奉りてと

謀り給ひ則ち大師手つゝ観音の尊像を比叡の瑠璃光佛四天王と

作らせ給ひ諸堂を建立し安置たりて石塔四十九基と起立し

蓋都率の四十九重と表し給ふる也又大師七種の珍寶此山に納り國家
の鎮押し給ふ故に七寶山と稱れり山八葉の如く是より且九所の秘窟
ありて金剛界胎藏界を表れり

寺中七坊 鏡照院 和合院 不動院 慈眼院 惣持院 寂靜院 泉藏院

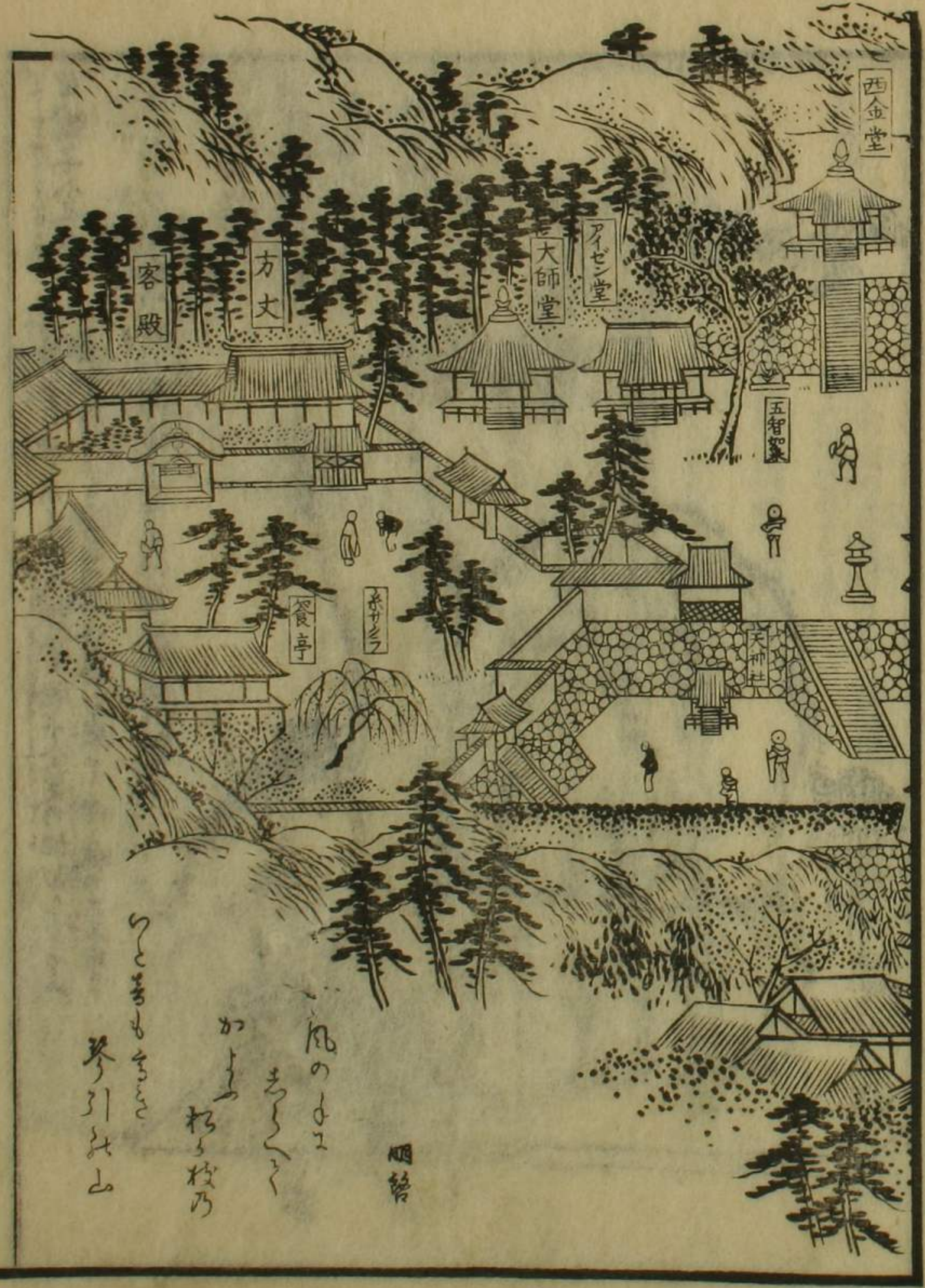
則當寺ハ八幡宮守護の社僧に無本寺之寺傳少所の御證文あり

其文曰

无

寛文七丁未奉聞二月十八日御判あり

後醍醐天皇御時八幡社僧觀音寺と雲迎寺と地蔵院
本末統相臨双方中合令礼成奉獻寺とて琴引八幡乃
社僧に依りて又依りて是れ亦近代後地蔵院法流お侍
儀も依りて相嗣し雖然社僧に奉寺と有るも依りて
後醍醐寺止減罷歸社僧に依りて後醍醐正月礼儀
依りて是れ在來の如き也乃後醍醐社僧



西金堂

大師堂

方丈

客殿

養心亭

風のよこ
 かしら
 松の枝乃
 引山



観音寺

中金堂

五明の鐘

三門

太子堂

金三ノ四十七

日澄上人之墓

宿居の芝の傍にあり富士山開基百餘上人入定の地ありといふ
巨巖に重の上より遠忌の平塔婆と建てる傍に楠の大木あり

石の平塔婆の面 引千百回忌倍増威光塔下鐫す

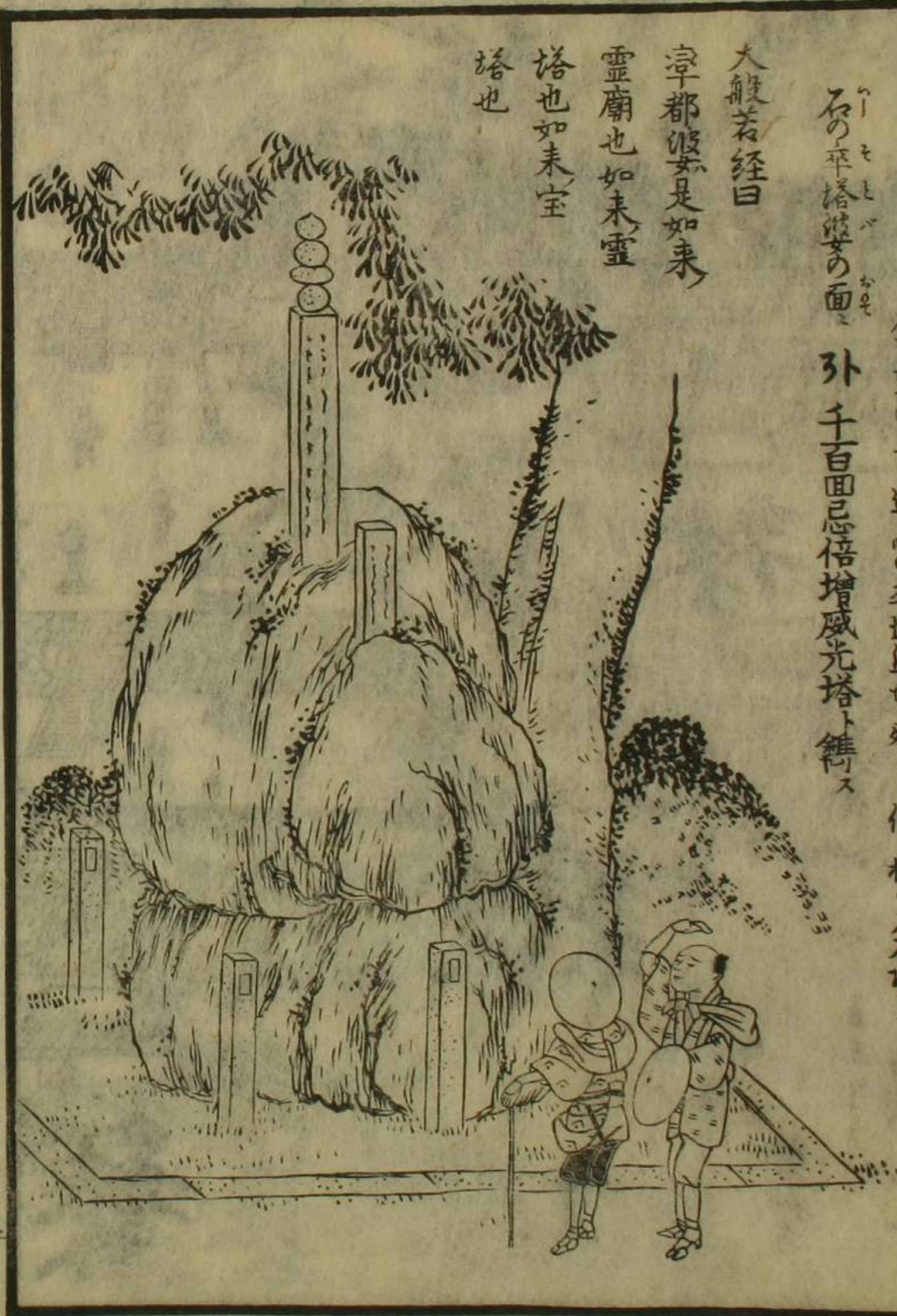
大般若經曰

寧都波如是如來

靈廟也如來靈

塔也如來室

塔也



金三ノ四十八

芭蕉翁早苗塚

上人の塚の前の傍にあり近頃古碑の後辺に俳友新お碑と建添
且石垣燈籠等も造る

古碑之面 芭蕉翁早苗塚

新碑之面 早苗とれりややせりし志のし指しとる

兼白

先人帶河文魚也者埋翁真跡之短冊立此碑焉
歷年既久而將頽蕪仍於社友再修之

昔惟天保十龍次己亥年十月上院

發起 早日庵五蕉

百泉 鶯居

木非 苔石

社麥 木丈



芭蕉翁繪詞傳曰

志はよりち摺れ石を尋くあふり里とよけ入修けし山邊石を尋く
土に埋てあり里はききのかくも海をさうへげ山の上とく感りし
を修東の人けまをまをあへて此れを試とくるをゆくみくは
そよあせし石乃面下とあへりきりしと云

早苗くる平りややむりしと云のよ摺

此まげり白芭蕉翁海無の御の耐ふけの里とての吟あると云
其まは乃短冊とていへてその尚塚と称とてし新まは碑とてし

芭蕉翁伊賀国上野の藩士なり其先祖平家の侍孫平兵衛宗清の
末孫として父と松尾監左衛門とて上野の赤坂に住せり知名と金作と号
し後半七郎宗房とよび更て忠右衛門とて正保の始に生を明暦乃頃
出て藤堂家に仕り馬の業のいとぬ六風舟の道と好む和歌とよび依
てりて擬して時の宗道北村を吟とて師と久寛文六年の秋とて仕

金三ノ四十九

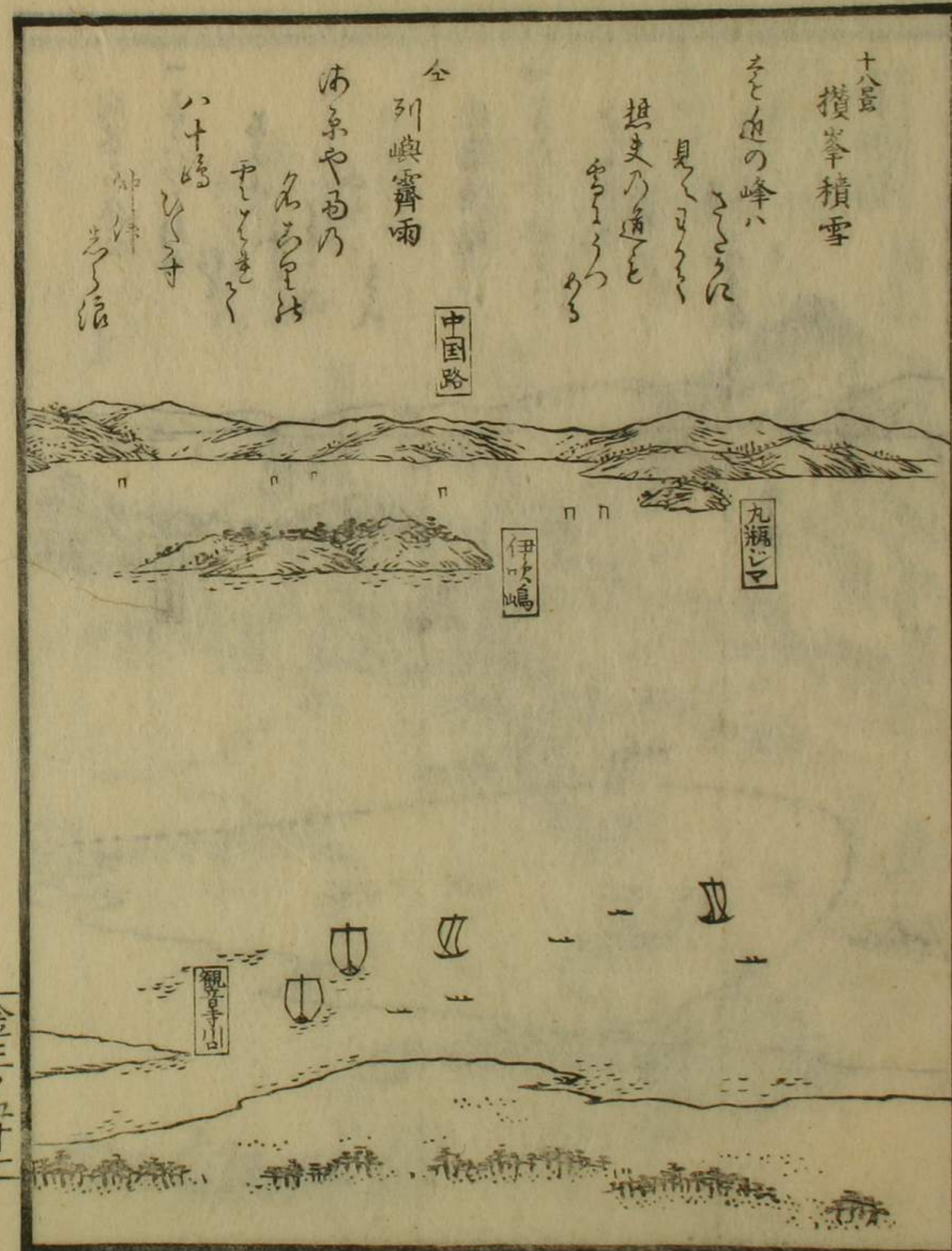
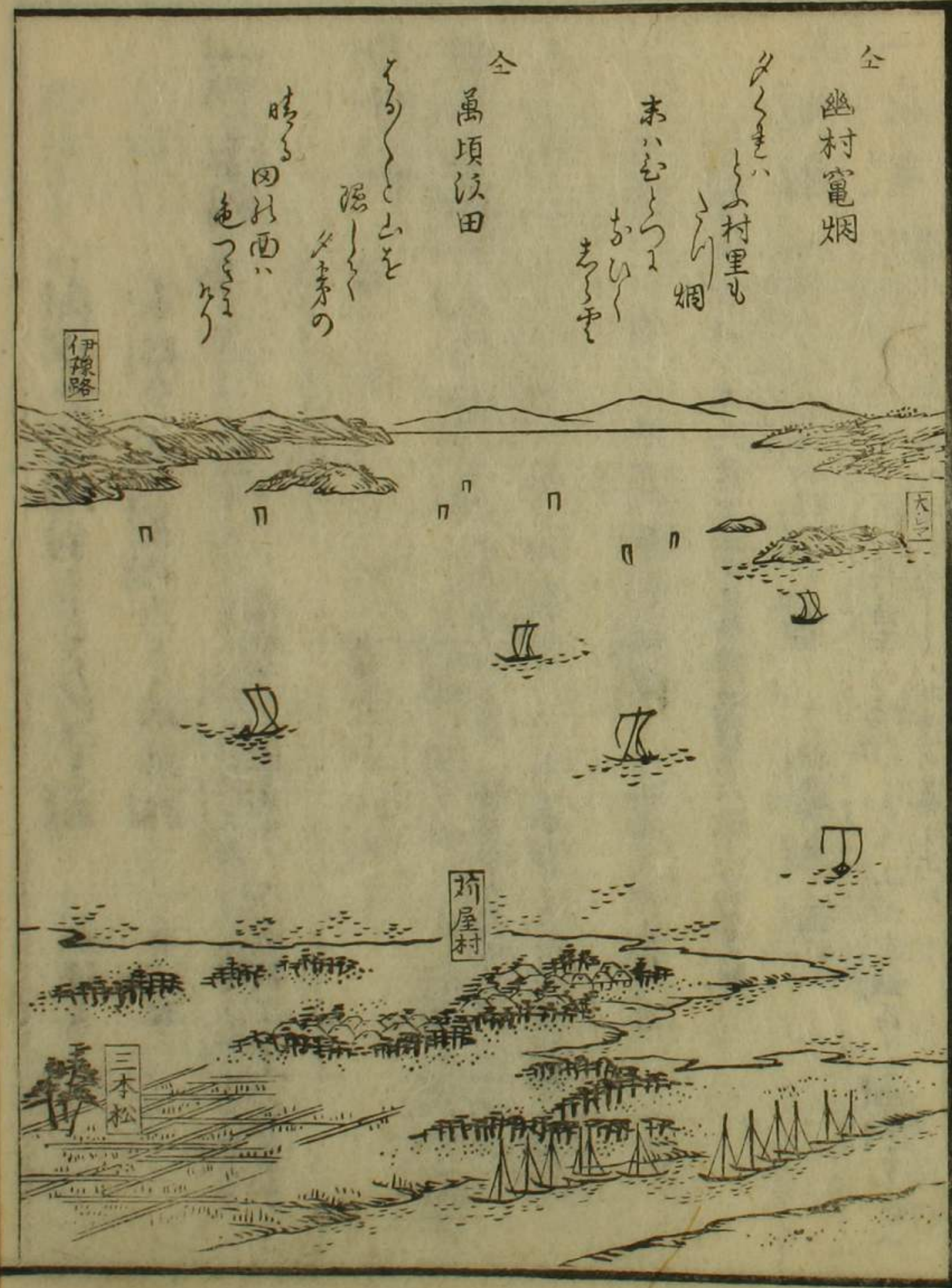
有明濱

琴弾山の松蔭の濱とて當国第一の絶景なり

有明は濱やまがけしつゝふみ

蒼乳

辞して遁せし是より延宝の年かて跡と雲去成りてす執せりつゝの次
より東武深川に住居し菴の庭に芭蕉と教多我て樂しめたる也住
菴と芭蕉菴とよび芭蕉翁と稱せり其母頃年いそ四十歳といふ
此道の師也す本今湖春父子と名給の号とよぶまも偏に陰徳茶
あふ下娘の名桃青といひ別号と風羅坊といひ芭蕉といひ等
く風破まやなりぬと観せりとて一名と泊船堂と号する深川八海
近き地として門泊東里萬里船の詩の景をかろくあふ下能精の道と建
正風作と真起一家と成道と慕ふ徒儀のいふ集り入門とての投拳
すばか元禄七年十月十二日浪浪南御堂おれ屋の別屋とて没し年五十
一歳



在明也 後陰をくくし雨を雨 舟静

不枯の夜に有明乃くはれ松

山口清水

禁の屋への金剛水もつて専ら去大師の所を破りて
清水をりて日用とれ

悪魔石

清水の辺りの岨より悪魔の面を彷彿とす

燧燧丸瓶島大嶋伊吹島

ともふ有明の濱の向ふより就中伊吹島八家教三
百計ありて此里に觀音寺の坊中泉藏院在住に

高谷神社

高谷村稻積山より高稻積官と云ふ豊稻積とも云稻積明神と稱れ

祭神 一座 木花開耶姫命 延喜式神名帳出

二代實錄貞觀六年九月十五日戊辰讚岐国正六位上高谷ノ神

不動ノ籠

稻積山の後方岡本村より委しく拾遺の巻一圖に

一夜菴

琴弾山の連峯七宝山真昌寺の境内あり山崎宗鑑より幽居と云ふ
菴中一宗鑑の像と安ん奉りて拾遺の篇入出に

宗鑑、近江國の住人として緒方宗謙の長子支那弥二郎と稱し又通稱寛三

郎と号し乾山光琳の兄あり足利家仕仕後城南山崎小隱道に故山

崎と稱し書法光悦流に連し連歌おとび俳諧と能に天文十二年より

没し年八十五とぞ一夜菴の説結さるる有と云ふも茲に淺し

伊勢二郎義盛智謀之古趾

琴弾山の麓と云ふ古趾の標ありて盛表記に
云義盛十七騎と以て成貞三千余騎と從下時出會一野

元暦年間源義経屋島平家と合戦の時分平軍阿波臣部大輔成能

が子息傳内左衛門尉成直と千余騎と率して河野四郎通信と攻んとて

伊豫國越々一閉と義経伊勢二郎義盛と命して渠を百捕とある

べと下知りて義盛兼つて先下藤の男一人と呼出し脛巾とさせ表

笠小旅籠おと持せ傳内左衛門の伺い遇て言ふと様と奉りて教へ

一日路先へ立せて伊豫の國越々り義盛十七騎の良黨と具して一日

路後まで向ひたりてあれと見て是は嗚呼ある為業と云ふ僅十七騎の

伊勢二郎義盛謀
 以て傳内左衛門成直が
 三千余騎し降参せむ



金三ノ五十三

勢よりつて二千余騎の兵を捕んと余りたる大膽ありと言はくしるる
傳内左衛門河野が彼向いしうも通信は屋島の合戦よりして國への
らさきに残る家子郎等と多く討取詭火とけ生捕りも許す連
て屋島の合戦も是れよりして伊豫の國より後岐よりして敵りる通より
彼下鵬の男小會成直是れ見て已に何行より何國へ通る者ぞと問ふ屋
島より伊豫へ罷る者ぞと候ふ答へ備屋島の合戦よりと問ふ男答
つて云様伊豫國の河野四郎殿の伯父福良新と郎殿の頭實檢の源氏
九郎判官より名つて雲霞の勢屋島の内裏へ押寄せ野軍にて候
いし源氏の爲に内裏と焼きて平家船小乗て下會へ戦ひ給ひし程
平家無難源氏多勢ならん終つて平家負て生捕りたるもいふは
あり其数より中にも阿波の太輔の降人あり河野四郎殿は千余騎

て屋島馳つて其餘國九國より軍勢教萬馳集り阿波後岐浦源氏の軍
勢充滿よりして後過成島より心弱具又氏部太輔も降人出たり向
し旁に臆しつて去りて下鵬の鏡の裏に信用を不足は尚も實否を
問ふと馬を打て行はく後岐國

源平盛衰記に本郡琴造宮より考ふる小本郡琴造宮よりは區を本郡
東渡して西香東山田の二郡より東へ寒川郡小列を南へ阿州阿波郡隣り然
るに伊豫國に到る便と申も是れ今も豊田郡琴彈宮より豊田郡西濱より
西へ伊豫國より往返の街道より東へ隣りて二郡郡より豊田に二郡に
心得遠い二郡と本郡守に書置りし書置りし故に改め之
豊田郡琴彈宮より所より伊勢二郡義盛傳内左衛門行會より義盛登臨
より所はつたむに傳内左衛門見え御目見源氏の良等より伊勢二郡義盛と
い者平家公場の軍に負け内裏以下人の家皆焼大臣の父子小松の公

達耻あり大庭虜らま給ふ汝父民部の大輔頼とて降今素以櫻岡の大夫
 勝浦にて虜らま此入義盛頼る汝父降今も頼とて櫻岡の大夫と
 逾きて源氏に隨ひ奉るべき猶意趣あるか顔とも見故郷に皈らん
 と欲は義盛頼して善計らしん斯りて昔に給く通侍とて
 取直し失束と解く成直らる下賜の詞といひ今義盛が演言相違ひと
 思ひんれば父降泰の上成直りて同ト事とてらし弛甲と脱して成盛
 に従ふ我盛降令の法とて大将の許し將向ふ是義盛を謀らつてわら僅か
 十七騎とりつて二十余騎と容易く従へて古今に雙びおれた勲切らま判
 官あれと賞給ふ又民部大夫の實を降承せしにけりいづれにても既に成直虜
 らまわら願且平家の軍を束かと思ふ折々成直大将の命よりつて又状
 と遣は源平之合戦勝劣雲泥也後勘有思前降源家早任同心之思必逐面

謂之志と書し斯程成能も源氏に順ふ故に彼國の住人等皆あらし
 源氏に属せしむ

金毘羅泰信名所行國會之之卷終

